

# 仙林寺だより

NO. 36  
編集・発行  
松田正貴

## 行事報告

### 「お彼岸とは」

仏国土、涅槃、お浄土、お悟りの世界等々、何れも仏教徒が理想とする世界を表した言葉の数々です。お彼岸も言わば同義ですが、正確には到彼岸という言葉から判るように、目指す場所(名詞)にとどまらず、「行く」という動詞が付加されます。彼岸、悟りの世界へ到る、「彼岸へ行きましょう」と、むしろ積極的な働きかけの言葉です。そしてお誘いくださるのは、仏弟子の先輩菩薩様、誘い文句もしっかりと用意してあります。しかし、言葉だけではいかに馬の耳に念仏、私達が実際に行う為の、具体的な実践の徳目として挙げられております。表題は、六波羅蜜(ろくはらみつ)布施・頂く事で生かされる命、お返し的心を忘れずに。持戒・つながりがあったての自分の存在、回りのルールを尊重しましょう。忍辱・「どうせだめだ」とすぐあきらめず、堪えて天命を待ちましょう。精進・結果を急がず、一歩一歩を努力精進致しましょう。禅定・心をコロコロさせないで、信念を持って過ごしましょう。

とかく涅槃などと言うと、受動的なあの世での事と考えがちですが、実は生前目指すべきもの、お墓参りも勿論結構ですが、一週間の修行期間が本来の意味。おはぎだけでなく、菩薩様の心も味わいたいものです。

十月二十三日の寺子屋は、境内のハーブで遊ぶ+癒しのローソク作りです。遊びに来てください

### 小さな小さな美術展

お盆には、人間国宝芹沢銈介展を開催、多くの方々に楽しんで頂きました。今回はお彼岸らしく、しつとりと仏画に親しみました。

檀家の鈴木淳子さん、ご長女清瀬由利子さんとの母子仏画展、仏菩薩、天部に到るまで十数点、細密に写仏し、丁寧に彩色された仏様は、やはり絵画とは違った、信仰からの深い趣があります。手を合わせご覧になっているお年寄りなどは、見るというよりは、観る、または、拝する、という心持ちではなかったでしょうか。

心象の仏、菩薩様、私達が目指す心のあらわれとして、仮に具象の形をとられたのが仏像としてのお姿です。あこがれの彼岸に導く、また、すでにお住まいの仏様です。有り難く参じ拝させて頂きました。



母子仏画展



曼珠沙華

### 花だより

彼岸と言えば、彼岸花、別名曼珠沙華の名を冠する仏教と縁の深い花です。「一瞥すれば悪業を断つ」と言われれば、その通りと頷かざるを得ない程の薬の趣。しかし、その根には毒が、悪業を断つには、見方を誤らぬ正しい心でという前提あつての事でしょう。

### ちよつと一言

#### 落ち葉

西洋では、落ち葉はシャベルで集め捨てるのだそうです。文化の違いとは言え、何となく寂しい感じが致します。我が国では「落ち葉掃き」の言葉通り、箒で掃き集め、焚き火で風情を感じ、また掃き清められた苔庭に、わざと紅葉の葉を散らして後の余韻を楽しむ心がありました。つくづくこの国に生まれて良かったと感慨を深めます。

ところで紅葉と言えば、良寛様と貞心尼との最後のやりとりを思い出します。(後述)諸行無常の理を知る出家の身でありながら、やはりこの様な別れは、悲しいものでございます。その返歌としてご自分の最後の姿を、ありのままの様相を見せて紅葉にかけて、この身も自然の様相以外の何物でもない事実を、しっかりとお詠みになられたものでしょう。ところで、もみじの木は、その寿命が尽きる年には、プロペラ状の種を沢山つけて、子孫を残そうとします。また、今年の夏の暑さがこたえたのは人間だけではなかったようで、境内のハンカチの木も、たつた一つつけた実を守るようにして葉を一枚残らず落としてしまいました。

植物の世界でもこの様です。人の旅立ちであれば尚更の事、大きな「教え」と言う種を残して居られるはず。受け止める私達の心がどうあるかが問われます。

生き死にの境はなれて住む身にも

さらぬ別れのあるぞ悲しき

貞心尼

うらを見せおもてを見せて散る紅葉 良寛